

世界に広がる豊かな人的ネットワーク

本研究科が持つ多様性と豊かな人的ネットワークの広がりを世界地図上にてピックアップし、本研究科の在学生・修了生による世界各地の開発フィールドでの活躍や現地に寄せる思いをご紹介します。

尾田 直美〔修了生〕

JICA ガボン支所 企画調査員（ボランティア事業）

これまでアフリカ諸国で企画調査員（ボランティア事業）として仕事をしてきました。2025 年 9 月からはガボンで業務を行っています。

以前は服飾業界で働いていましたが、チュニジアにおけるボランティア活動をきっかけに、海外ボランティア人材のコーディネーターとして国際協力に貢献する仕事へと大きくキャリアチェンジしたため、開発の基礎を学びたいという思いから入学を決意しました。

論文執筆の道のりは決して平坦ではなく、2019 年には当時勤務しており研究対象でもあったスーダンで政変が起こり退避帰国となり、予定していた現地調査ができなくなりました。また退避後は勤務国が変更になるなど、本務としても研究を続ける上でも非常に苦しい状況でした。現地に行けない分文献研究に力を入れ、主な調査対象を変更したり、email を用いるなどの工夫を行い、また、指導教員の熱心で丁寧な指導のおかげで論文を書き上げることができました。論文執筆において得た学びは研究成果だけでなく、あきらめずにコツコツ続けることや、目の前にある壁に圧倒されても必ず乗り越えられる、という気づきを得たことです。



池田 麻衣〔修了生・国際社会開発専攻 博士課程 3 年〕

現在、ガーナで仕事をする傍ら、障害児と家族を支援する NPO でボランティア活動を行っています。

日本では理学療法士として子どもの成長・発達のお手伝いをしてきました。日本の福祉制度とニーズの乖離に疑問を抱き、青年海外協力隊に参加しました。そこでの経験や考えていたことを、改めて学術的に考え直したいという思いで入学を決意しました。修士課程では、「障害」に向き合うためには理学療法という専門性を超えて、幅広い視野と知識を深めることが重要であることを痛感しました。現在は、ボランティア時代に関わった NPO のもとで学んだことを基盤に実践的な活動をしています。具体的な支援の提案や実践を通して、関係者と共にガーナにおける「障害」を考えています。

宮本 圭〔修了生〕

JICA 長期専門家、
母子手帳の活用による母子継続ケア改善プロジェクト（ネパール）
順天堂大学・千葉大学大学院、非常勤講師

ザイールのルワンダ難民キャンプでの医療支援を皮切りに、東南・南アジア、中南米、中東で国際協力に従事し、現在ネパールで母子保健プロジェクトに携わっています。本研究科の入学は、ネパール農村部の女性の健康課題に直面した際、その保健課題を相対化し、開発学の枠組みから理解し、省察したいと思ったことがきっかけでした。フィールド調査では住民と対話し、地域特性やローカルの文化から保健課題を読み解く研究手法や態度を学びました。眠る間を惜しんでゼミ仲間と熱く議論した論文執筆は楽しく、その後博士課程に進みました。本研究科には年齢も背景も専門性も異なる多様な人材が集まり、異なる研究関心について共有し学び合うカリキュラムと環境が準備されています。国際社会開発領域で実践と研究を両輪に歩みたい方に本研究科をお勧めします。



北原 照美〔修了生〕

ネパール交流市民の会
JICA 草の根技術協力事業プロジェクトマネージャー

本研究科は、モルディブのユニセフで乳幼児期発達支援プロジェクトに携わりながら学びました。それ以前に青年海外協力隊員として「住民参加」を念頭に活動しましたが、形ばかりでどこか無理強いをしている感覚がありました。ところが、大学院での学びを現場で活かすと、住民が「参加」ではなく、自ら生き生きと動き出すことが多々あり感動しました。また、活動しながら教授陣や仲間にタイムリーに相談でき、すぐに現場に応用できたことは効果に直接つながりました。現在はネパールの母子保健プロジェクトに携わっています。特に力を入れているのは、両国の市民の皆さんと共に行う「海を越えたご近所づきあい」です。プロも市民も自ら動かなくなるような機会を作り、日常の中で相手を思いやり、支え合う「“民際”社会開発」を楽しんでいます。



駒走 拓三〔修了生〕

JICA カンボジア事務所

1996 年に青年海外協力隊に参加して以来、ODA の仕事に関わり 30 年が経ちました。アフリカ、南アジア、大洋州を経て、現在はカンボジアで勤務しています。先日、定期的に面会しているカンボジア外務省の日本担当課長が、大変疲弊した様子で「国境問題解決が思うように進んでいない」と漏らしました。2025 年に両国間で激化した軍事衝突は、同年 12 月の和平協定で表面上の平和を取り戻したものの、現在も不買運動など「静かな争い」が続いています。知人のタイ人もカンボジアを離れることになり、両国に友人がいる身として非常に歯がゆい思いです。今回の紛争を激化させた要因の一つに、市民の SNS による行き過ぎた発信が挙げられています。IT が急激に発展する今、我々ユーザーには情報を正しく見極めるリテラシーが求められます。世界中の院生と議論を交わした本研究科での学びは、複雑化する国際情勢の課題を多角的に捉え、解決への糸口を模索するための確かな基盤となっています。



藤崎 文子〔修了生〕

日本赤十字社バングラデシュ代表部
首席代表

南アジアにおける社会開発支援経験を相対化したいと思い本研究科に入学しました。当初は自ら関わったプロジェクトを修士論文に取り上げるつもりでしたが、研究を進める中で大学院ならではのテーマを選びたいと考え、活動の現場で掘り所にしてきた開発支援の枠組みを先住民族の福祉という視点から批判的に検討しました。これまでの「常識」を疑い、調べ、自分の言葉で表現するという研究の醍醐味を経験できたと思います。大学院 卒業後、在バングラデシュ日本大使館勤務を経て、現在は日本赤十字社のバングラデシュ代表部首席代表として避難民支援事業の実施や各国赤十字社との調整等を行っています。本研究科は、掲示板上的な講義やスクーリングなど、社会人が受講しやすいコース設計に加え、現場経験豊富な教授や多様な経歴を持つ研究生とのネットワークが大きな魅力です。現場の経験をもとに、理論的に考え新しい視野を得ることのできる貴重な機会だと思います。開発支援の現場で頑張っている人にお勧めします。

